

青木周蔵の渡独前の修学歴 (2)

——漢学の修業時代——

森 川 潤

(受付 2009 年 10 月 30 日)

はじめに

当時予ノ居住セル厚狹郡藤曲ノ隣村宇野郷ハ國老福原越後氏ノ領地ニシテ福原氏ハ茲ニ學校ヲ設ケテ其ノ家臣ノ子弟ヲ教育セシヲ以テ予ハ茲ニ至リテ句讀ヲ學ヘリ

青木周蔵は、ヨーロッパから帰国し、第二次山県有朋内閣の外務大臣に就任する明治31(1898)年、すなわち50歳をすぎたところに『青木周蔵筆記』(以下、『筆記』)を起稿する¹⁾。24字、12行の288字詰め原稿用紙に丹念に書き込んだ自筆の草稿は、国立国会図書館憲政資料室におさめられている。全体は第一から第二十七までの27話からなる。ドイツへ旅だつまでをしるした第一は、原稿用紙23枚の分量である。そのうち11枚半、すなわち半分が漢学の学習にとりくむ時期にあてられる。冒頭の3行分が漢学の学習をはじめたころの記述である。

青木周蔵は、天保14(1844)年、萩城下からとおくはなれた萩藩西南部の吉田宰判土生村^{おはぶ}小土生の地下医三浦玄仲の長男に生まれる。三浦家は、代々、医業をいとなむ家柄である。当時、儒学だけでなく、医学、本草学、兵学、洋学に関する学術的な著作はすべて漢文で書きしるされていた。家業をつぐために、周蔵は読み書きだけでなく、漢学をまなばなければならない。しかし、周蔵は医業につくために学習するうちに、プロイセンへ派遣され、明治6(1873)年に外務一等書記官心得に任命される。以後、「獨逸癖」、つまりドイツ最員の駐独外交官としての経歴をたどり、明治19(1886)年には外務次官、明治22年には外務大臣に登用される。その間、子爵に叙せられ、明治34年には枢密顧問官に任じられる。

周蔵は、1869年5月(明治2年4月)にプロイセンの首都ベルリンにたどりつき、1年あまりのちには「普通ノ読書力ヲ有シ他人ノ言説ヲ理解シ得ル」ようになり、1870年冬学期にベルリン大学法学部に学籍登録する。駐日北ドイツ連邦代理公使ブランドから北ドイツ連邦政府に日本人留学生のうけいれについてはたらきかけがあったとしても、渡独前にドイツ大学での学術研究にたえうるほどの学殖を身につけていたといえることができる。

慶応四年に萩藩費留学生としてプロイセンへ派遣されるまでの周蔵の修学過程は4期に区分することができる。第1期は、故郷の親元から近所の寺子屋にかよい、読み書きをならう段階である。嘉永3(1850)年から安政4(1857)年ころまでの時期である。

第 2 期は、宇部村の郷学菁莪堂と豊前中津藩の家塾誠求堂における漢学の学習の段階である。まず、寺子屋をおえた周蔵は、宇部村中尾にある萩藩永代家老福原家の郷学菁莪堂で漢学の修業をはじめめる。それは、安政 4 (1857) 年ころから万延元 (1860) 年ころまでである。ついで、万延元年春、豊前中津にわたり、中津藩校進修館の教授手島仁太郎がいとなむ家塾誠求堂に入門し、本格的に漢学の修業にとりくむ。万延元年春から文久 2 (1862) 年末までの時期である。

第 3 期は、萩城下における蘭学修業の時期である。周蔵は、中津で福沢諭吉の実家をたずね、諭吉の生き方に触発され、帰藩し、文久 3 年春には城下町萩で本格的に蘭学の修業をはじめめる。萩藩侍医能美隆庵の家塾に寄寓するが、元治元 (1864) 年春、陪臣や地下医にも萩藩医学校好生堂の門戸が開放されると、好生堂に入門する。やがて大村益次郎にオランダ語のクリミア戦争記を熟読するよう命じられ、概要を講じたときに「大分讀メル」という評価をえるほどになる。慶応元 (1865) 年 11 月、好生堂教諭役の青木研蔵の養子にむかえられ、青木周蔵に改名する。しかし、軍政総掛の木戸孝允などに海外へ派遣するようはたらきかけ、藩から長崎で待機するよう命じられる。この時期は、元治元年春から慶応 3 年 6 月までである。

第 4 期は、長崎における蘭学修業の時期である。この時期は、戊辰戦争の勃発により長崎奉行が長崎から脱出する慶応 4 年 1 月の前後に区分される。前半期は、元治元 (1864) 年 7 月の禁門の変により、萩藩が朝敵となり、諸藩に長州討伐の勅諭がくだされていた時期である。天領の長崎では、萩藩の人びとにとっては敵地であり、周蔵は幕府の直轄学校である精得館に入門することはできず、大村藩医長与専斎の家塾で修業する。後半期には、新政府の九州鎮撫総督沢宣嘉が長崎にはいり、長崎を統治する。周蔵は、精得館にのこったオランダ人医師マンスフェルト (Constant George van Mansvelt) のもとで修業をはじめめる。その間、高知藩遊学生萩原三圭と懇意になり、やがて留学国としてプロイセンを選択し、プロイセンへ旅だつ。

本稿は、青木周蔵が漢学の学習段階において、すなわち少年期から青年期にかけ、なにを、どのようにまなんだか、あきらかにすることを課題とする。漢学とは、中国の儒学や中国の学問の総称であるが、青木周蔵のばあいには、中国の古典医薬書を解読閱讀するために、経書をテキストとして訓読し、原義を読み解く学問を意味する。

青木周蔵の渡独前の経歴については、『筆記』第一の記述によらざるをえない。ひとが自己を語るのは、第 1 に自己探求や自己認識への欲求、第 2 に過去を回想することがもたらす快楽、第 3 に自己の正当化への欲求がある²⁾ からである。自伝には、意図的な粉飾や事実の歪曲がつきまとうだけでなく、記憶違いや事実の誤認もありうる。なお、『筆記』第一からの引用については注記しない。

一 郷学菁莪堂

団七は、安政4（1857）年、12歳ころまで藤曲村の寺子屋師匠のもとで読み書きをならう。藤曲村の寺子屋にも、萩藩永代家老の福原家の家臣や諸士の子弟も寺入りする。武士の子弟は、寺子屋で読み書きを1、2年まなんだのち、福原家の菁莪堂へすすむ。菁莪堂でまなぶあいまに、寺子屋にかようものもいる。団七は、安政4（1857）年ころから宇部村の菁莪堂にかよう。自宅のある藤曲村北条から隣村の小串村を横切り、宇部村中尾の福原邸内の菁莪堂まで直線にして1里たらずの距離である。

福原家は、厚狭郡宇部村だけでなく、吉敷郡や阿武郡にも給地をもつ。萩屋敷に常住し、藩政にたずさわるが、宇部村中尾にも屋敷をかまえる。宇部村には、幕末期には200人ほどの家臣がいた³⁾。第23代福原家当主の親俊は、天保年間に宇部村中村に家臣の文武の稽古場として郷学を設置し、晩成堂となづける。家臣には、晩成堂への就学を義務づける⁴⁾。親俊は、弘化2（1845）年に佐々木向陽を招聘し、中臣通格待遇で学頭に任用する。中臣通とは、萩藩の一門に次ぐ寄組に相当する上級家臣である。

佐々木向陽は、享和元（1801）年4月に長崎唐通事勝木家の次男に生まれ、圭甫となづけられる。のちに肥後熊本におもむき、藩学時習館教授辛島塩井の家塾に入門し、儒学を研鑽する。塩井は、幕府の昌平黌において経書を講じたこともある朱子学者であり、文政4（1821）年に時習館第4代教授となる。

天保3（1832）年9月、向陽は遊学のために江戸にむかう途次、大風により船が難破したために、小郡宰判の丸尾に上陸する。阿知須浦の庄屋江口茂兵衛は、遭難者のなかにいた向陽が該博な知識をそなえていることに気づき、阿知須浦にとどまるよう懇請する。阿知須浦の付近一帯は白松庄とよばれ、福原氏の給地である。

向陽は、江口茂兵衛の妹岸をめとり、阿知須浦に家塾をひらく。向陽の家塾には、近郷の子弟が蟬集し、その名声は福原親俊にもとどく。親俊は、向陽を招請し、晩成堂の教育をゆだねるために、家系がたえていた佐々木家を向陽につがせる。名も圭甫から向陽にあらためる⁵⁾。

晩生堂は、向陽が学頭に着任した弘化2年夏に菁莪堂に改称し、翌年、福原家邸内にうつされる。熊本藩学時習館における学課課程の最終段階は菁莪齋と称する⁶⁾。熊本の辛島塩井のもとでまなんだ向陽が、菁莪齋にちなんだ改称したとおもわれる。「菁莪」とは、『詩経』「小雅」の「菁菁者莪」と題する詩篇に由来する。『毛詩尚書』によれば、「菁菁者莪」は「材を育するを楽しむなり。君子能く人材を長育す。則ち天下之を樂喜す」と解される⁷⁾。佐々木も「取諸育才之義」，すなわち英才を教育する、と解釈する⁸⁾。

菁莪堂の職員は、文武惣督、監察、学長、都講、助講、助教からなる。家老、すなわち福原家当主が文武督につき、「海寇手當ノ長」として近傍の海防に責任をおうだけでなく、萩

藩の政務に参与する。監察には中臣がつき、側用人を兼ねる。学長は中臣で、参事を兼ね、「政教一致」につとめる。いわゆる儒官である。都講と助講は侍史、すなわち書記を兼ね、塾生の指導にあたる。もともと俸禄をもつために、「役料」は「心附」ていどである⁹⁾。菁莪堂は「文武之業為士之専務也」¹⁰⁾ という理念にもとづき、もともと本藩が推進する海防策の一端になる。

塾生は、寄宿生が30人、そのうち10人は領主から学費を支給される給費生である。自費通学生も60人ほどうけいられる。学科は、「漢學算法筆道習礼及兵學方馬劍槍銃陣」である。福原家の家臣は、「文武両道ハ士ノ職トスル所兼学セサルヘカラス」として就学を義務づけられる。塾生は7, 8歳で入塾し、15歳ころまで在学する。

嘉永4年5月に向陽がみずからさだめた「功令」¹¹⁾ は、給費生をおもな対象とした規定であるが、団七のような通学生の修学の実態を窺い知ることができる。塾生は学力に応じ4級にわけられる。

「講日」には「辰時」(午前8時)に当直が^{たく}柝をうつのにあわせ、監官、寄宿生とともに通学生も入堂し、列座する。学長の向陽が入堂し、まず聖像に拝跪する。その後、生員に対座し、互礼をかわしたのち、講義をはじめめる。朱子学者向陽は、経書のなかでは、とくに四書を講じる。頼山陽と親交があり、『日本外史俚言抄』を著しているところから、『日本外史』も講じたとおもわれる。

講義後、学長は後堂へしりぞく。講義について学長に直接質問することができるのは最上級の4級生だけであり、3級生以下は疑問があれば、都講に質さなければならない。講義中の「密語」や「欠伸」は厳禁である。

その後、学長あるいは都講が臨席し、会読をはじめめる。生員は対座し、順番に経書の1章か2章を講じる。この講義にたいし異議がある生員は、長幼にかかわらず、また座席の遠近にかかわらず、疑義をただすことができる。都講は討論の是非を判定し、冊子にする。質問は2回までに制限される。講義をおこなった生員が3回以上「誤解」をおかしたばあいには、都講から注意をうける。「其已ニ授ケシ物ヲ以テ是ヲ試ムル」ために、春秋2回、試験が実施される¹²⁾。

団七は、すでに13歳になるが、最下級の経書の素読の段階である1級の「句読」に編入され、助講、助教の指導により素読にとりくむ。その後、安政6年ころまで句読の課程でもっぱら素読をまなんだために、会読には参加していない。

菁莪堂における素読の課程が具体的にどのようなものであったかあきらかではない。そこで、同時代の儒学者が採用していた教授・学習方法やテキストを援用し、団七が菁莪堂で、なにをどのようにまなんだかを考量する。

漢籍が日本に舶載されたとき以来、漢文を日本語の文章構造にしたがって訓みくくするため

に訓点が考案され、原文の行間や字間に、返点、すなわちレ点、一・二・三・四、上・中・下、甲・乙・丙などの文字や符号がつけられる。江戸時代には、林羅山が経書に訓点をほどこしたものは道春点、山崎闇斎が訓点をほどこしたものは嘉点または闇斎点とよばれ、儒学をまなぶものにとって標準的なテキストになる。文化2(1805)年から安政6(1859)年にかけて、林家家塾の塾頭、幕府昌平黉の教授として3000人の門人をそだてた「当代学界の巨頭」佐藤一斎¹³⁾が経書に訓点をほどこした一斎点のテキストも、19世紀前半に普及し、標準的なテキストになる。一斎の門人のなかには、渡辺華山、佐久間象山、山田方谷、横井小楠、大橋訥庵といった逸材もいた。多くの門人は、一斎が採用した儒学の教授・学習方法を継承する。

一斎は、素読を句読とよぶ。句読についてつぎのように述べている¹⁴⁾。

句讀ノ次第、斯ノ如クナルベケレドモ、總テ童蒙ノ記憶シ易キ四書ヨリ始メ、五經カ小學ニ移カタ便ナレバ、必シモ次第ニ拘ラズ授クベシ、

句讀ハ、多ク貪ルニアラズ、唯覆讀ヨリ力ヲ得ルモノナレバ、兎角習讀シテ、暗誦スル程ニ至ベシ、然ラザレバ、五經終ルトモ、獨看出來ガタキナリ、

句読または素読は、個別教授または個人学習である。四書をテキストとして、記憶力の旺盛な幼年初学者に句読素読の反復練習をくりかえさせる。文義にふみこむことなく、漢文口調のおもしろさをおしえ、テキストを暗誦させる。四書をおえると、五経や『小学』にうつり、同様に暗誦するまで反復練習をくりかえさせる。四書や五経の素読により、漢籍読解力を身につけさせる。

貝原益軒は、素読する課書の順序について、さらに詳細に述べている。

経書ををしゆるには、^{まず}先孝教の首章、次に論語^{がくじへん}学而篇をよましめ、皆熟^{じゆくどく}読して後、其要義をもあらあらととききかすべし。小学、四書は、最初よりよみにくし。故に^{まず}先右に云^{いう}所の、文句のみじかきものを多くよませて、次に小学をよめせ、後に四書・五経をよましむべし¹⁵⁾。

益軒は、「やすきを^{さき}先にし、^{かた}難きを後にすべし」という原則にしたがい、まず『孝教』、『論語』学而篇をまなび、そのうえで『小学』、四書、五経と読みすすむべきであるという。

団七が菁莪堂に入門し、1年あまりたった安政5年8月に親俊が急逝する。12月になると、徳山藩主毛利広鎮^{ひろしげ}の6男に生まれ、藩士佐世親長の養子となっていた元僦^{もとたけ}が藩命により福原家の家督を継ぎ、越後と称する。

元僦が福原家第24代当主になったのち、菁莪堂の性格はかわる。元僦は、向陽に「士氣奮發」のために『靖献遺言』を講じさせる¹⁶⁾。『靖献遺言』は、江戸前期の崎門派の朱子学者浅見綱斎が著したものである。貞享4(1687)年の脱稿直後に上梓され、幕末の元治年間、慶応元年に翻刻される。楚の屈原から明の方孝孺にいたる中国の8人の忠臣の故事を記したものである。その根底には、「亂世^レナケレバ本法^ノ忠義ハ見エヌ」¹⁷⁾という皇国史観がある。崎

門派独特の大義名分論や尊王論は幕末の尊王討幕論に大きな思想的影響をおよぼす。吉田松陰もその影響をうけたひとりである。団七も『靖献遺言』の講義を聴いたはずである。

安政5年には、条約問題や将軍継嗣問題をめぐり政局が極点に達する。萩藩も幕府から日米修好通商条約の調印について意見をもとめられ、5月に「叡慮の通異夷御拒絶」と結論をまとめ、「朝廷に忠節幕府に信義祖宗に孝道」という藩是三大綱領をうちだす。藩主毛利敬親は、条約問題について朝廷と幕府の意見に径庭があることから、7月に「内外之急變必然」として「皇國之御武威」をたてる方策について建言するよう藩士に命じる¹⁸⁾。翌8月には、両相府諸員から提出された改革意見を集約し、63ヶ条からなる改革綱領をまとめる。その中核となるのが「御軍政之事」である。

軍制改革には、「農兵之事」がもりこまれ、「御兩國御手廣之海岸急變之節防禦方之儀在住之諸士而已にては難行届に付農兵御引立置肝要之事と奉存候」¹⁹⁾として、海岸防備のために農民がかりだされることになる。

安政6年6月、長崎の西洋銃陣の直伝習に参加していた来原良蔵が萩にかえり、山田亦介とともに小銃隊を編成するよう藩に建言する。建言にもとづき、萩藩では、12月から軍制改革に着手する。軍制改革の主眼は、軍事組織を銃砲戦に適應できる近代的な軍隊に再編成することであり、封建制度の根幹にかかわる問題である²⁰⁾。萩藩は、以後、保守的な家臣の抵抗を排しながら、西洋軍制の浸透をはかることになる。

萩藩は、長崎で雷管点火式のゲペール銃を千挺購入し、万延元(1860)年2月には和銃を廃止する。対外防衛のために文化12(1815)年に導入された神器陣と呼ばれる陣形も安政6年12月に廃止となる²¹⁾。

元憫は、翌6年11月、宗家が推進する軍制改革について次のように意見を具申する。

乍、恐君上於江府西洋陣法被遊御研究候而御確定ニ付、永久御家之御陣法ニ被成御用度段仰出、謹而奉領承候、左候得者是迄御有掛之銃陣ニ而者勝利無之、洋法ハ規律モ克相立候事故、此ニ勝リ候陣備ハ無之ト被思召付候而、仰出候儀ト乍、憚奉存候、素リ謗才之私義、殊ニ洋法1向心得不申事ニ御座候得ハ、善惡共ニ如何申上候而宜候哉当惑仕候得共、別段良策モ無御座候得者、御趣意ヲ奉シ候外致方無之次第ニ御座候、乍、去古來之御制度被改ニ付而者、御国中人心之向背モ如何可有之哉、此儀ハ当路ノ任ニ可有御座候得ハ、私之考ニモ参リ兼候義ニ奉存候²²⁾

こうした意見が軍制改革に消極的な家臣の典型的な意見であろう。元憫は、宗家の意向にさからうことはできないが、なお粘性のつよい語調で西洋銃陣の導入に慎重な姿勢をくずさない。元憫は、急激な改革、すなわち神器陣と呼ばれる「古來之御制度」を廃止し、西洋銃陣を導入すれば、封建的な身分制度が崩れ、家臣の士気がおとろえることを懸念する。こうした考え方が藩内の大勢をしめ、洋式への軍制改革が遅滞したために、文久3(1863)年に士

庶混成の奇兵隊が結成される。

意見書は「館中稽古」に言及する。添付された「館中日程表」には、1の日には「寄会」、3の日には「館中出勤」、4の日には「御用日 銃陣」、5の日には「騎兵」、6の日には「銃陣」、7の日には「三手東武場試合」、8の日は「御用日」、9の日には「館中出勤 銃陣 講談八ヨリ」といった具体的な訓練の日程が明示される。「館」とは菁莪堂をさす。軍事訓練に多くの時間があてられ、「館中稽古止」、すなわち講義をおこなわない日が多くなる。元憊は、元治元(1864)年4月、禁門の変の責任をとり自刃する半年ほど前に菁莪堂を廃止し、あらたに宇部村中尾に維新館を設置する²³⁾。維新館は、もはや軍事訓練のための施設にほかならない。

文久3(1863)年11月、佐々木向陽が他界する。その前後に、向陽の女婿貞介が菁莪堂の学頭につく。貞介は、天保6(1835)年1月、奥阿武宰判須佐浦に萩野安積の第3子に生まれ、名を時行、通称貞介、号を松墩という。永代家老益田家の郷学育英館にまなび、安政5(1858)年には、育英館教授の小国剛蔵の紹介により吉田松陰の門生になる。松陰の苛烈な思想に感化され、師友をもとめ、京都や江戸に遊歴する。

貞介は、万延元(1860)年までに帰国し、藩学明倫館大学寮に在籍する²⁴⁾。松陰は、江戸に送致され、すでに刑死していた。貞介は、やがて佐々木向陽の思想にひかれ、その門生になる。後嗣のいない向陽のひとり娘八重の婿にむかえられ、佐々木家の後継になる²⁵⁾。元治元年6月、元憊が京都に出陣したとき、貞介は参謀として従軍する。

萩藩は、文久元(1861)年3月には、諸郡に郷学を設置し、農兵を養成するよう命じる。万延元(1860)年2月には「村民之内相選銃陣を訓練し農兵を取立、郷学校ニおいて令管轄、異変ニ臨ミ在住之者並農兵ニ而迅速之处一先致防御」²⁶⁾と農兵銃陣の導入を具体化する。元憊のような給領主が設置する郷学はもとより、あらたに郷学を新設し、農兵の拠点としようという計画である。元憊は、毛利家一門として菁莪堂をいちはやく軍事訓練の施設に改編する。

萩藩が尊皇攘夷運動の急先鋒として幕末の動乱のなかに突入すれば、毛利家一門の福原家臣団のための学校である菁莪堂は、軍事訓練の場としての性格をつよめることになる。陪臣とはいえ、武士が武闘集団としての側面を剥き出しにすると、団七のような「平民」は悲哀をあげあわされることになる。団七は、菁莪堂において封建的階級制度の重圧を思い知らされる。抑揚のない回顧のなかに、団七が負った精神的外傷の深さが窺われる。団七は、武士との交遊を忌み嫌うようになる。

『筆記』は、菁莪堂について次のようにしるす。

其ノ家臣ノ子弟ハ予等領域外他村ノ子弟ニ対シ交際上常ニ一個ノ墻壁ヲ築キテ待遇自ラ疎遠ニ流レ一ニ例外ナキニアラサリシモ予ト学友トノ交際ハ充分親密ナルコト能ハサリキ

菁莪堂の同門のなかに、石川小五郎、のちの河瀬真孝がいた²⁷⁾。石川小五郎は、青木周蔵より4歳年長の天保11(1840)年の生まれである。文久2(1862)年に萩藩正規軍先鋒隊に入隊して以来、軍人としての経歴をたどる。慶応3年に長州五傑のひとりとしてイギリスにわたり、明治4(1871)年までロンドンに滞在する。青木周蔵がベルリンにいたとき、石川小五郎はロンドンに滞在していた。

父親の玄仲が団七を菁莪堂に通学させたのは、医業の基礎である漢学をまなばせるためである。団七は、家業をつぐためには、漢学をまなばなければならない。漢学をまなぶことによって、第1に、『傷寒論』、『金匱要略』、『本草綱目』といった中国の古典医薬書や古法方の医薬書を読むことができる。

中国医書は、鎖国後も輸入されつづけ、江戸時代をとおり漢籍医書の翻刻がおこなわれる。しかし、中国が明代から清代にかわった(1644年)のちも、日本で翻刻された中国医書、つまり和刻漢籍医書はほとんどが明代までに出版されたものである。後漢の張仲景が撰したといわれる『傷寒論』、『金匱要略』などの『張仲景方』^{ちようちゆうけいかた}と呼ばれる一連の医書は、翻刻をかさねる。とりわけ江戸中期の古方派は、『傷寒論』を聖典視し、400種におよぶ研究書を生み出す²⁸⁾。

本草学についても、明代の医師李時珍が著した『本草綱目』は、慶長年間に渡来し、林羅山が長崎で入手し、幕府に献本して以来、翻刻をかさね、本草学の基本文献として民間の医者にも普及する。日本で翻刻された多くの医薬書には訓点が付されるが、字義を知り、構文がわからなければ、訓点つきの漢文は理解できない。

萩藩では、天保11(1840)年に医学館が創設されたとき、教科担当制が採用され、馬屋原大庵は『傷寒論』を、川村養信が「本草綱目啓蒙」を担当する²⁹⁾。他藩の医学校でも、『傷寒論』や『本草綱目』は不可欠の科目であった。蘭方医学が藩立の医学校にも浸透しはじめるが、伝統的な漢方医学は蘭方医学の受容基盤になっていた。民間では、なお漢方医学が主流であり、出版冊数という点で漢方医書は蘭方医書が拮抗していた³⁰⁾。

第2に、萩藩の医学館でも、オランダ医書の訳書である『医療正始』、『外科必読』、『眼科新書』が講じられるが、それらは漢文、あるいは訓読漢文に訳される。訳書を読むためにも、漢文の素養がもとめられる。

『眼科新書』は、ウィーンのヨーゼフ・アカデミー(陸軍軍医学校)教官のプレック(Joseph Jacob Plenck)が1777年にラテン語版“*Doctorina de oculorum*”として、1778年にドイツ語版“*Lehre von der Augenkrankheiten*”として刊行したものである³¹⁾。プレックの医学書は、18世紀後半に相次いでオランダ語に翻訳され、出版される³²⁾。プレックの『眼病学』は、1787年にロッテルダムの眼科開業医のプロイス(Martinus Pruys)により翻訳刊行される。

『眼病学』は、日本に舶載され、寛政11(1799)年に宇田川玄真により翻訳され、『泰西眼科全書』と題する写本として流布する。杉田玄白が大槻玄沢の所有する写本を購入し、実子立卿が増補・改訂し、文化12(1815)年に『眼科新書』として刊行する。構成は、眉病、睫毛病、眼瞼病、涙管病、白膜病、角膜病、眼球病、蒲桃膜病、水様液病、水晶液病、硝子液病、網膜病など12編からなり、全体で118の症例をとりあげる。

『眼科新書』の序は、つぎのとおりである³³⁾。

余續家翁之緒務脩其學凡和蘭之書有益于治術者極力購之而刀圭之暇與家弟及同學相謀以譯定之者若干部但奈余弗啻性劣寸非加以多病故不能研精焉動輒依同社所成者亦多云家翁每歎曰人云喪明尤為大患豈可無良術乎蓋蘭人之格物窮理其專門必當有能儘其精微者如幸獲之而譯行以博供濟世則吾願是矣一日余過大槻磐水而見蘭書一帙即此編也余乃袖而歸以供家翁之覽家翁一覽鶴躍大喜遽就購之以藏家塾向宇榛齋譯之然多事鞅掌不遑脫稿後任家弟譯訂之亦既經數歲未肯告成蓋恐其粗脫誤事也近者和蘭譯官馬君穀里奉官命自崎陽來而在都下余屢周旋家弟亦尤需接焉家弟因就重譯之於是始得其条理悉貫校訂全訂而今茲梓行諸世嗚呼家翁夙有此願今既過耄始得償之不亦謂時至矣乎余聊記其喜以弁卷首云爾

漢文は、もともと漢字がならぶだけで、句点や読点はなかった。のちに、句点や読点がつけられるようになるが、句点と読点の区別はなく、漢字の右につけるのが慣例であった³⁴⁾。訳文ではない序は、いわゆる純漢文でしるされる。

凡例では、原書についてつぎのようにしるす。

一原書は^レ係^ル入^{セル}爾^マ泥^ニ亞^ア國[、]醫[、]郁[、]泄[、]弗[、]牙[、]哥[、]勃[、]不[、]冷[、]吉[、]所[、]撰^{スル}而[、]以[、]羅[、]甸[、]國[、]語^ヲ記^ス焉[、]後[、]和[、]蘭[、]國[、]醫[、]麻[、]爾[、]低[、]奴[、]斯[、]不[、]路[、]乙[、]斯[、]者[、]重[、]訂[、]且[、]加[、]自[、]說[、]而[、]以[、]和[、]蘭[、]邦[、]語^ヲ譯^ス之[、]其[、]鏤[、]版[、]在[、]彼[、]紀[、]元[、]一[、]千[、]七[、]百[、]八[、]十[、]七[、]年^ニ實^ニ我[、]天[、]明[、]七[、]年^{ナリ}（後略）

序は漢文でしるされるが、凡例には訓点がつけられる。いわゆる準漢文である。返り点と添え仮名により、日本語として訓みくだすことができる。

訳文である本文にも凡例とおなじように訓点が付される。

眼球畧説

夫眼^ハ者[、]雙[、]之[、]圓[、]球^ニ而[、]居[、]面[、]中[、]鼻[、]之[、]兩[、]側^ニ以[、]鑒[、]識^{スル}萬[、]物[、]之[、]要[、]具^ニ也[、]蓋[、]以[、]六[、]膜[、]三[、]液[、]為^ス其[、]質[、]而[、]六[、]筋[、]其[、]後[、]底[、]連[、]于[、]鑒[、]神[、]經[、]而[、]在[、]骨[、]空[、]之[、]内^ニ其[、]空[、]圍[、]極[、]堅[、]固[、]也[、]骨[、]空[、]名[、]之[、]曰[、]目[、]窠^ト

古代以来、日本も漢字文化圏にくみいれられ、中国から先進の学術文化がつたえられる。江戸時代にも、漢文が学術的な内容を記述する文章であった。訳文は、漢文から訓点つきの漢文へ、さらに漢文読み下し文へと変化する³⁵⁾。緒方洪庵は、「抑^{そもそ}も翻訳は原書を読み得ぬ人のためにする業なり^{わざ}」³⁶⁾という立場にたち、翻訳にあたる。

洪庵は、安政5(1858)年から文久元(1861)年にかけて『扶氏経験遺訓』を翻訳刊行する。

序文は漢文であるが、凡例と訳文である本文は漢文の訓みくだし文である。以下は、本文の冒頭部分である³⁷⁾。

第一編

急性熱病「フェブリスアキュター」羅／「ヘーテコールツ」蘭

總論

凡^ノ熱病品類多シト雖モ之ヲ要スルニ心藏血脈ノ運動亢進シ諸器ノ運営増盛シ以テ體温過越セル一轍ノ急性病ナルノミ」故ニ諸熱病其初メ熾衝性ナラサル者ナク勢ヒ纔^カニ増劇スレハ輒^チ眞熾衝熱トナル」是故ニ又諸熱病必シモ其區域ヲ固守セス精力ノ旺衰ニ隨ヒ生機ノ轉變ニ應シテ或^ハ互ヒニ交換シ移リ或^ハ逐次ニ經過シ傳フル^ヲアリ^リ喻ヘハ始^メ單純ナル者熱性ノ飲食ヲ誤用ノ熾衝熱ニ移リ瀉血過度ニ由テ又神經熱トナリ終ニ亦間歇熱ニ變スル^ヲアルカ如シ

この文体は、寺子屋などにおける往来物を教科書とする庶民教育において習得する文体とはことなる。あくまでも、漢文の訓みくだしの学習のなかで習得される文体である。洪庵の訳文については、つぎのような評価がある。

扶氏ハ、病症用劑ヲ詳細記載、蘭醫實地施治ニ適切ナル、此書ヲ第一ト爲ス。(中略) 吾推服スル所ハ、譯字ヲ下シ、病理ヲ論ズル、適切簡明。漢土醫書ニ博渉スル者ナラネバ爲ス能ハザル所。文章雅馴、字句ノ精練ナル、蘭書一方ニノミ涉リタル者ノ譯シ得ル所ニ非ズ³⁸⁾

「扶氏」とは、『扶氏経験遺訓』である。評者の岡千仞は、『扶氏経験遺訓』の訳文は、症例や薬剤に関する記述が詳細にわたり、蘭方医学の臨床にもっとも適していると評する。中国の医薬書を渉猟しなければ、流麗な漢文をあやつることはできない。蘭書だけを繙読したとしても、適切な訳文をつむぐことはできない。

菁莪堂が漢学学習の場ではなくなれば、団七を菁莪堂にかよわせる理由はなくなる。団七は、おそくとも安政6(1859)年には菁莪堂への通学をやめる。『筆記』によれば、団七が菁莪堂への通学をやめたのは、「之ニ必要ナル學問ハ程度低キ宇部ノ學校ニテハ修ムルコト能ハス」と考えたからである。これは、その当時の団七が考えたことではない。のちに青木周蔵が考えついた理由である。素読とは、「文章の意義の理解はさておいて、まず文字だけを声を立てて読むこと」(『広辞苑』第4版)である。素読の段階では、テキストの意味や内容にはふみこまず、漢籍を日本語に訓みくだす練習がくりかえされる。

団七は、万延元(1860)年、16歳のころ、「漢學ノ知識四書ノ素讀ヲ爲シ得ル」ようになる。素読は、意味もわからないまま四書を声にだし訓みくだし、暗誦する漢学の基礎にすぎない。このころ、父玄仲からときおり医術の手ほどきをうけ、訳書により「解剖學生理學及ヒ物理學等」のいわゆる「泰西學術ノ一端」にふれる。玄明に改名したのはこのころであろう。医

者という家業をつぐためである。

『筆記』は、玄明に改名し、医者への修業をはじめたころ、将来について思いめぐらしていたことについて追懐する。

将来修學ノ方針ニ就テハ恰モ五里霧中ノ感ナキニアラサリシモ幸ニ身体比較的強健ナリシカ爲メ僻地ニ踟躕シテ醫ヲ學フカ如キハ何トナク物足ラヌ感アリタリ且勿論確タル方向ヲ定メ得タルニハ非レト何トカシテ国家ニ益スル學問即チ政治ニ關係アル學問ヲ修メ漸次政治ニ參與スヘキ位置ヲ得ントスル感念模糊トシテ腦中ニ生セリ然ルニ之ニ必要ナル學問ハ程度低キ宇部ノ學校ニテハ修ムルコト能ハス左リトテ藩學ニ入ルコト能ハサル身分ナレハ如何ニシテ此ノ目的ヲ達スヘキカ左思右考ノ末遂ニ笈ヲ他国ニ負ヒ階級制度ニ關係少ナキ地ヲ撰ヒ修學セント決心シ

玄明は、すでに医者になることに拒絶感をいだくようになっていた。それは、身体が強健であるにもかかわらず、医業をつげば、草深い家郷に閉じ込められるからである。虚弱な農民が苛酷な労働にたえきれず、庄屋や名主などをとおして代官や領主に届けで、許可をうけ、医者になる時代である。漠然とした思いながら、「政治ニ關係アル學問」を修め、「政治ニ參與スヘキ位置」に就きたいと思うようになったという。

「政治ニ關係アル學問」は、プロイセンにおもむいたのちにであった学問である。幕末の日本に政治学のような学問は存在しない。あえていえば、朱子学や徂徠学は政治論的な要素をふくんでいる。林羅山以来、儒家が儒官や藩儒に登用され、幕政や藩政に参与することもあった。しかし、それは異数の事例であり、玄明の選択肢にはなかった。

萩藩では、「政治ニ參與スヘキ位置」につくのは、萩または山口の国相府の要員、江戸方の行相府の要員といった藩政の中核にあるものにかぎられていた。玄明のような地下医の息子が「政治ニ參與スヘキ位置」に就くことは想像することさえできない。もっとも、相応の家柄の家に養子に入れば、可能性はある。

いずれにせよ、「政治」という発想はこのときのものではない。『筆記』が「目的」と表現する将来の進路は、郷関から脱出するために考案した方便である。青木周蔵は、青木家の養子になったのちにも、医者という職業になじめず、そこから逃れようという想いを「政治」という現実の到達点に仮託し、「政治ニ參與スヘキ位置」をえることを「目的」と位置づける。『筆記』では、「目的」を「宿志」、「素志」とも表現し、暗黙のうちに了解されたものとして多用する。それは、郷関からの脱出、海外への逃避、医業の放棄へとつながるライトモチーフとなる。

青木周蔵は、菁莪堂を「程度低キ宇部ノ學校」と呼ぶ。しかし、菁莪堂はレヴェルのひくい郷学ではない。学頭の佐々木向陽は、尊皇攘夷の急先鋒となった萩藩の政務に参与する永代家老福原家の郷学において「政教一致」につとめる立場にあった。師父吉田松陰をうしなっ

た萩野時行が修学のためにたずねくるほどの勤王思想家である。

『筆記』は、佐々木向陽についてはふれていない。最下級の玄明は、佐々木向陽の講義を聞いたとしても、その内容は理解できなかったであろう。すくなくとも、向陽とは個人的に直談したことはない。

藩学で修学することが「政治ニ參與スヘキ位置」に就くことにつながる。それにつながるない菁莪堂は、青木周蔵にとって「程度低キ宇部ノ學校」にほかならない。

父玄仲は、ただの地下医ではない。萩藩の地下種痘医にえられたことから窺われるとおり、翻訳書ながらも蘭方医学にふれようとする先進的な医者である。後継ぎ息子の玄明が漢学の基礎を習得したとしても、それで十分だとは思えない。玄明は、中断した漢学の修業の場をさがしもとめなければならない。

『筆記』は、萩藩における当時の教育の状況について回顧する。

予年漸ク長シテ學ニ志セシカ封建治下ニ於ケル階級制度ノ桎梏ハ予ノ如キ平民子弟ノ講學ニ念アル者ヲシテ頗ル困難ヲ感セシメタリ防長ノ首府タル萩ニハ藩學明倫館アリ藩士吉田氏亦私塾ヲ開キテ名聲郷党ノ間ニ高カリシモ藩學ハ士族ノ子弟ニアラサレハ入門スルヲ許サス松下村塾亦藩士ト伍ヲ結フ者ニアラサレハ強テ其門ニ入ルモ學友トノ交際円滑ナラサルヲ豫知セシメタルニ由リ予ノ為ニハ講學ノ道殆ント硬塞シタル有様ナリキ藩學明倫館は、藩士のための学校である。「予ノ如キ平民子弟」はうけいれない。『筆記』によれば、吉田松陰の私塾さえも門戸を閉ざしていた。私塾とは尊攘派志士の温床となった松下村塾である。吉田松陰の門からは、いわゆる松下村塾グループが輩出され、松陰の刑死後、尊攘運動の先頭にたつようになる。松下村塾は、政治結社の性格をおびる。高杉晋作、久坂玄瑞などのような尊攘運動を牽引する藩士や伊藤博文、山県有朋などのように「藩士ト伍ヲ結フ者」だけが松下村塾への入門をゆるされる。

玄明は、安政4(1857)年ころに寺子屋をおえる。吉田松陰が松下村塾を主宰したのは安政3年3月から安政5年12月までである。時期的には、入門することはできた。しかし、松下村塾には「入りたくて入り得なかった」³⁹⁾わけではない。実際、当時の玄明の選択肢には松下村塾は入っていなかった。玄明が住む藤曲村の近辺からは萩へ遊学する慣行はなかった⁴⁰⁾。

玄明は、宇部村の郷学菁莪堂においてはじめて武士に接する。豪放磊落な少年は、軍事訓練を中心とした施設に変容した菁莪堂から抛りだされる。その原因は、尊攘論にあり、その実践のためには武力をも辞さない萩藩の武士にある。

二 中津誠求堂

玄明は、生まれ故郷の土生村や藤曲村から遠望できる海を隔てた世界にあこがれていた。万延元(1860)年、16歳の春、「階級制度ニ関係少ナキ地」で修学するために、豊前中津にわ

たる。

『筆記』によれば、玄明が中津におもむいた経緯は、つぎのとおりである。

豊後日田ニ至リ廣瀬淡窓ノ塾ニ入ラントスル志ナキニアラサリシモ未タ此ノ方向ヲ確立シタルニ非ス唯中津ハ予ノ郷里ノ對岸ニ在ルカ故ニ兎モ角モ此ノ地ニ渡航セシ

安政期から万延期にかけて、福原家は家臣を他国へ遊学させていた⁴¹⁾が、菁莪堂がある宇部村からは、安政2年以降、毎年のように、咸宜園に入門する者がいた。藤曲村からも、安政3（1856）年2月に篠井数馬が咸宜園に入門する⁴²⁾。

玄明が、周防灘をはさみ、郷里の対岸に位置する豊前にわたり、咸宜園に入門しようと考えたとしても不自然ではない。享和元年5月から明治30年6月までに、64カ国4627名が咸宜園に入門するが、長門国と周防国の出身者が225名、全体の5パーセントにおよぶ⁴³⁾。萩藩から咸宜園へ遊学するものがおおいのは、人脈によるところがおおきい。福岡藩の儒医亀井南冥が長門国出身の儒医永富独嘯庵の高弟であった。永富独嘯庵を起点として、萩藩出身者が南冥・昭陽父子の亀井塾にまなぶ慣例がうまれる。亀井塾にまなぶ萩藩出身者のなかには淡窓と同門であったものもいた⁴⁴⁾。ただし、玄明は「未タ此ノ方向ヲ確立シタルニ非ス」、すなわち咸宜園に入門することだけでなく、漢学をまなぶことについても決意をしたわけではない。玄明は、どのような目的で中津におもむいたのであろうか。

私塾は藩学とはことなり、出身地や身分を問わず、他藩からの遊学者を受け入れる。とりわけ咸宜園は、「身分的差別が公然たるものであった当時の藩学の教育に対するアンチテーゼ」⁴⁵⁾として全国64国から塾生をうけいれる。咸宜園も、入門者の出身地や身分を問わない。そのかわりに、入門するためには、請人をたて、紹介状をたずさえなければならない。父親の玄仲は、だれかを請人にたて、その紹介状を玄明にたずさえさせていたはずである。

大村益次郎は、天保14（1843）年4月7日に熊毛郡上関宰判付きの藩医小泉玄常⁴⁶⁾を請人として咸宜園に入門する⁴⁷⁾。入門帳には、「周防國三田尻 村田宗太郎 廿歳」と記される。このとき、おなじ小泉玄常を請人として石州邑智郡矢上村の静間謙造、防州三田尻の大塚良亭、防州三田尻の梅田時蔵も入門する。大村は、三田尻の蘭方医梅田幽斎のもとで家業の医術を修業していたが、幽斎から「醫者として大成するには、どうしても漢書に通ぜねばならぬ。第一漢學の力がないと、醫者の本が讀めない」と諭され⁴⁸⁾、咸宜園に遊学する。

玄明が咸宜園に入門する意志があったとすれば、大村と同様に、漢方医学の基礎である漢学をまなぶためである。

諸芸をまなぶに、皆文学を本とすべし、文学なければ、わが熟しても理にくらく、術ひきし。ひが事多けれど、無学にしては、わがあやまりをしらず。医を学ぶに、殊に文学を基とすべし。文学なければ、医書をよみがたし。医道は、陰陽五行の理なる故、儒学のちから、易の理を以（て）、医道を明らむべし。しからざれば、医書をよむちからなく

して、医道を知りがたし⁴⁹⁾。

貝原益軒は、正徳3(1713)年に養生解説書『養生訓』を書きあげ、「択医」、すなわち医者を選び方についても言及する。18世紀はじめの所見であるが、蘭学の基盤がととのいつつあった玄明の時代にも首肯できる考え方である。父玄仲も、こうした考え方にたち、家業をつぐために漢学の修業に同意し、資金をおしかなかったであろう。

広瀬淡窓は、天明2(1782)年に豊後日田の商家に生まれ、筑前福岡の亀井南冥・昭陽父子にまなぶ。文化2(1805)年に郷里に私塾成章舎、のちの咸宜園をひらき、三奪法や九級の月旦評から窺い知ることができるような徹底した実力主義を採用する。三奪法は、年齢、入塾まえの学歴、身分や家柄を顧慮しないというものである。そうした方針にもとづき、無級、9級上下の19の等級がもうけられる。塾生は、毎月9回の試験で獲得した点数により昇級する。塾での学習活動の成果は、月旦評にしろされる。

こうした課業と試業をくりかえす実力主義は、淡窓が述べるとおり、適塾などの蘭学塾にもうけつがれる。

余カ門人ニアラサル者モ。亦其ノ風ヲ聞キテ。之ニ倣フ者多シ。或ハ文學ニ與ラヌ他藝ヲナス者迄モ。往々此風ニ倣ヘリ。教フル者モ此ヲ以テ教ヘ。學フ者モ此ヲ以テ學フ⁵⁰⁾

玄明は、咸宜園や広瀬淡窓について聞き知っていた。しかし、中津にたどりつき、「巨大ナル一城郭」を目のあたりにすると、玄明は「日田行ノ不可ナルヲ悟ル」。日田におもむき、咸宜園に入塾することを断念したのは、「広瀬淡窓ハ処士ニシテ日田ノ地タル亦城下ニ非ス」と考えたからである。もっとも、萩藩が37万石にたいし、中津藩は10万石の城下町にすぎない。萩藩内で種痘が実施されたさいに、種継ぎのために萩に連れていかれたとしても、玄明はおぼえていないであろう。

広瀬淡窓は、一介の処士にすぎず、日田も藩政の中樞である城下町ではない。日田のような僻地は、「隠者的ノ學問」を修め、「醫トナリ或ハ僧トナル者」には適しているが、「将来ノ目的」は達成できない。玄明は、城下町中津には「奥平家ノ藩校」もあり、「多少ノ學者」もいるだろう。藩学にはいれないとしても、「奥平家ノ藩士ト交ハラハ便宜多カラン」と考えたという。

玄明が翻意したのか、もともと城下町中津にとどまるつもりであったのか、『筆記』からは窺い知ることにはできない。中津にとどまる理由も、あきらかではない。第1に、『筆記』によれば、玄明は、菁莪堂において封建的階級の重圧を思い知らされ、「階級制度ニ關係少ナキ地」で修学するために海をわたった。にもかかわらず、玄明は城下町中津にとどまり、中津藩士と交誼をむすぼうとする。

第2に、『筆記』を執筆していたころの青木周蔵は、咸宜園から、医者や僧侶だけでなく、高野長英、岡研介、大村益次郎、上野彦馬、松田道之、長三州といったあたらしい時代をき

り拓いた逸材が輩出されたことを知っていたはずである。のちに養父になる青木研蔵も門下生のひとりである。玄明が渡海したころには、淡窓がすでに他界していたが、淡窓の没後にも、淡窓の養子青邨が塾主となり、清浦奎吾、横田国臣といった政界や法曹界を代表する人物を輩出したことも熟知していたはずである。かれらは、青木周蔵と同時代の人びとである。「入門簿」には、たしかに緇衣の名がおおくみられるが、青木周蔵は咸宜園の学問が「隠者ノ學問」ではないことは承知していたはずである。

誠求堂に入門するさい、玄明は塾主の手島仁太郎につきのように語っている。

予ハ醫家ニ生レタレトモ單ニ醫學ヲ修ムルヲ以テ満足スル能ハス将来他ノ學術ヲ修メント欲スル者ナリ

「隠者的ノ學問」に対置される学問、すなわち「政治ニ關係アル學問」は、「他ノ學術」に置き換えられる。『筆記』にみられる矛盾または誤認識は、漢学をまなびはじめたころから、青木周蔵が『筆記』を書きとめている現在の地位をめざしていたことを強調するために意図的につくりだされたとおもわれる。「平民」にすぎない青木周蔵は、みずから頑強な意志をつらぬき、学問を研鑽した結果、政官界に地位を獲得したことを誇りにしていた。

明治19(1886)年、青木周蔵は第1次伊藤内閣の外務次官に就任する。明治三傑が亡くなったあと、青木周蔵のまわりでは、薩長藩閥の志士官僚が政治を壟断していた。かれらは、いずれも幕末・維新期の修羅場をくぐり、武人として勲功をあげた人びとである。伊藤博文、山県有朋といった萩藩閥の元勲も、足軽や中間という軽輩ながら、玄明が中津で漢学の修業にはげんでいたころには武人としての経歴をたどり、政官界の頂点にのぼりつめる。

玄明が豊後中津にわたったのは、「隠者的ノ學問」に対置される学問をまなぶためであり、藩政にたずさわる中津藩士と交誼をむすぼうとしたのは、藩政にたずさわるためである。つまり、漢学、すなわち儒学をまなぶ目的は、医業書にしるされた漢文を訓みくらすためではなく、為政者としての武士階級の素養を身につけるためである、と青木周蔵はいいたかった。

玄明は、中津城下にたどりつくと、口留番所にたちより、「城下著名ノ學者ハ何人ナルヤ」とたずね、数人の儒者の名を聞きだす。万延元年3月、城下町中津の家塾のひとつである鷹匠町の誠求堂をたずね、入門する。仁太郎は、文化9(1812)年に中津藩士の家に生まれ、やがて物斎と号する。かつて長府藩学敬業館の教授であった中津藩儒山川東林のもとで研鑽し、その後、熊本に遊学する。熊本では、藩学時習館の第4代教授辛島塩井の家塾に入門する。塩井は、幕命により昌平黉で講義をおこなったこともある朱子学者である。宇部菁莪堂の佐々木向陽も、おなじころ塩井のもとで研鑽していた。時習館では、第2代教授蕨狐山のもとで朱子学が正学となる。仁太郎は、帰藩後、中津藩学進修館の教授に登用される⁵¹⁾。経書に通じ、「最モ力ヲ四書五經ニ致ス」。四書は、『学庸論孟』とも呼ばれ、朱熹が『礼記』から『大学』と『中庸』を独立させ、『論語』、『孟子』と合わせ、儒教思想の真髄をつたえる入門書

としたものである。

入門時の塾主の手島仁太郎について、『筆記』は、徂徠学派の学統に属する儒家だと述懐しているが、仁斎学派の藩儒であったといわれる⁵²⁾。しかし、実際には四書を重視する朱子学を奉ずる。中津藩では、享保年間に古義学が隆盛し、藩学の主流になる。幕府の寛政異学の禁以降、藩学進脩館では「經義朱註を宗とし兼て古註を可用」という方針にかわり、「朱註」、すなわち朱熹の集注^{しつちゅう}が採用されていた⁵³⁾。

萩藩学明倫館では、享保 4 (1719) 年の創設以来、萩生徂徠の古文辞学を奉じてきたが、嘉永 2 (1849) 年、明倫館の移転落成を契機として、第 9 代祭酒山県大華のもとで朱子学にあらためられる。支藩の藩学や郷学も明倫館の学風にならう。玄明は菁莪堂において朱子学者佐々木向陽のもとで修業したが、学統には拘泥する気配もない。

藩学進脩館教授の手島仁太郎が藩学に準じた教則を家塾に採用していたことは、以下の藩学教則⁵⁴⁾から窺い知ることができる。

文學生 甲等 會讀生、各塾舎アリ獨看ス 乙等 會讀生、各塾舎アリ獨看ス 丙等 素讀詩經書經ヲ畢へ稍講義ヲ習フ者 丁等 素讀生 各等生徒學術已ニ上進シ春二月 秋八月ノ試験ヲ待ツ能ハサルモノ有レハ等中一區ヲ畫番シ之ヲ別ツ 素讀毎日辰時ヨリ 午時ニ至ル 會讀毎日未時ヨリ申時ニ至ル 筆道毎日午時ヨリ來時ニ至ル毎月六回 淨書 講釋毎日時間定リナシ各等適宜 詩文會毎月六回午時ヨリ申時ニ至ル但夜會ニ 於テスルヲアリ 夜學 素讀復習、點燈ヨリ戌時ニ至ル但長夜ノ際ハ子時ニ至ルモ勝手ノヲ會讀、點燈ヨリ子時ニ至ル但長夜ノ際ハ子時ヲ過ケルモ勝手ノヲ

学科課程は、甲・乙・丙・丁の 4 等に区分される。丁等は最下級で、素読の段階である。丙等は、素読をおえ、講義を聴く段階である。甲・乙等は、会読の段階で、同時に独看にはげむ。甲等と乙等の相違は明示されないが、その相違はテキストの難易度によるのであろう。甲・乙等は城下の家塾でまなび、丙・丁等は藩学でまなぶ。玄明は、入門後 1 年余りのちの文久元(1861)年 5 月には 4, 50 人の塾生のなかで、「意外ニモ早ク已ニ高弟ノ斑ニ列セントスル」、すなわち上等二級会頭、塾長代理という地位⁵⁵⁾についたという。下級の丙・丁等を下等とすれば、甲・乙等は上等ということになる。上等二級とは、乙等に該当するとおもわれる。藩学へすすめない玄明は、すべての課程を誠求堂でおさめなければならない。

誠求堂における教授・学習課程は、素読・講義・会読・独看といった課程からなる。講義は講釈と同義である。玄明は、すでに「四書ノ素讀」はできるようになっていた。誠求堂では、口頭による試業によって、つぎの講釈の段階からはじめたとおもわれる。しかし、具体的な教授・学習方法、テキストはあきらかではない。ふたたび佐藤一斎が採用した講釈、会読、独看という儒学の教授・学習方法、それに応じたテキストについて概観する。

一斎は、講釈についてつぎのように述べている⁵⁶⁾。

繰返シテ講ズベシ、然レドモ、餘リ聽者ノ倦ミヲ生ズル事モアラバ、小學又ハ詩書ノ類モ、兼講スベキナリ、學庸ハ本註ノ外、或問ニ據テ、未說ノ正シキヲ擇ミ、羽翼トナスベシ、先ヅ文義ヲ失ハザル様ニシテ、諸義理ノ能ツマルヤウニ有ルベシ、講ズル時ハ根本ヲ重クシ、枝葉ニ涉ラザル所緊要ナリ、

素読をおえ、独看の段階にはいった学習者に、師は、四書について繰り返しかえし講義する。この段階では、文義の理解が中心になる。学習者は聴講するだけでは倦厭する。単調にならないように、『小学』、詩書なども講じる必要もある。あくまでも枝葉末節にわたることなく、朱熹の註解に依拠しなければならない。たとえば、「學庸」、すなわち『大学』と『中庸』については、『四書集注』のほかに、「或問」、すなわち朱熹撰の『四書或問』のなかの『大学或問』と『中庸或問』に依拠しなければならない。一斎は、陽明学の影響をうけ、「陽朱陰王」と評されるが、門人にたいしては朱子学者としての立場をつらぬく。

手島仁太郎は、講釈の段階で唐詩や宋詩を講じる。玄明は、仁太郎が講じたり、吟じたりする詩の世界に新鮮な気持ちで接したとおもわれる。のちに書簡に李白の古詩を引用したりする。

講釈がおわれれば、会読にすむ。一斎は、会読という学習方法についてつぎのように述べている⁵⁷⁾。

右ノ書ニテ、大抵文義ニ通ズルヤウニ成ルベシ、但シ此類書ノ會終ルニ拘ラズ、此内二三種スミテモ、文義通ズル者ハ、獨看ヲ始ムベシ、

一斎が会読のテキストとしてあげるのは、『小學』、『十八史略』、『孔子家語』、『大戴禮』、『劉向說苑』、『蒙求』、『春秋左氏傳』、『國語』、『史記』である。煩雑になるが、これらのテキストの概要をあげておく。

『小學』は、朱熹が監修し、その友人劉清之らが編集した初学者課程のテキストであり、児童に日常の礼儀作法や長上につかえ、友人と交わる道などを説く。『十八史略』は、元の曾先之^{そうせんし}の撰になる史書で、太古から宋末までの歴史を編年史として逸話をまじえ、簡略に記したものである。室町時代に日本に伝来し、江戸時代には初学者向きの漢文読本として流布した。『孔子家語』^{けいご}は、孔子の言行および弟子との問答、伝聞などを「左伝」、「史記」、「新序」などから収録したものである。『大戴禮』は、前漢の戴徳の撰で、周、秦、漢代の礼説をあつめたものである。『劉向說苑』^{りゅうきやうぜいえん}は、前漢代の劉向の撰で、儒教的立場から伝説や故事を収録したものである。『蒙求』^{もうきゆう}は、唐の李瀚^{りかん}撰の幼童のための教科書で、古代から南北朝時代までの古人の伝記・言行で相似するものを二つずつ四字韻句とし、八句ごとに韻をかえたものである。『春秋左氏傳』は、十三經のひとつで、魯の歴史をしるした『春秋』の解釈書である。『國語』^{さきゆうめい}は、春秋時代の左丘明の著とつたえられ、春秋時代の八か国の歴史を国別に記したものである。『春秋左氏伝』と重複するところが多いため、『左氏外伝』とも呼ばれ

る。『史記』は、前漢の司馬遷の撰になる黄帝から前漢の武帝にいたる紀伝体の史書で、中国の正史である。『日本書紀』などの日本の史書の模範になる。

一斎は、このうち二、三のものについて文義を把握できれば、独看をはじめるべきだという。会読に参加しながら、同時に独看にとりかかる。一斎は、会読については具体的に述べていない。

会読は、「文章術の泰山北斗」荻生徂徠⁵⁸⁾が儒学の教授・学習方法として導入したといわれる⁵⁹⁾。徂徠は、従来の講釈だけによる教授法には「十害」があると指摘する⁶⁰⁾。そのいくつかをあげる。

- ・讀を廢し聽ちやうを務むるの弊、必ず行間に副墨無き者を讀む能はざるに至りて、而る後に極まる。其の害、五なり。
- ・講説の間、業す已に和訓を廢すること能はず。故に其の字義を説く、且しばらく和訓に依傍して、勢ひを趁ひて義を成す。聽者但だ其の説の通ずべきを見て、便ち本より然りと謂おもひて、其の本義を離るること已すに遠きを知らず。其の害、七なり。
- ・其の間豪傑者有るも、一たび講肆を開けば、弊風に扇られ、貨を懸けて售らんことを求め、門庭遂に立つ。或いは孔・孟の宗旨此に在りと謂ひ、或いは閔・洛の正脈焉に存せりと謂ふ。圈套一たび設け、多少の英才、皆な其の彀中に入る。夫れ學問の道、古へより、飛耳・長目は聰明を廣益す、と謂ひて、天の才を生ずる、艸木の區別さいせつりて以て別るるが如くす。其れをして才に隨まかせて自ら達せしめば、猶ほ恐らくは風雨摧折の患有らん、而るを況んや其の枝幹を縛し、其の根莖を屈めば、何に縁りて生長して、以て棟梁とうりやうの良きを成さんや。其の害、十なり。

講釈の第5弊害は、聴講に専念するあまり白文を訓読することができなくなる点にある。第7の弊害は、講釈が訓読によって説明されるために、それを鵜呑みにし、本義から乖離するおそれがある点にある。才気あるものも、受動的に、無批判的に講釈を聴くために、型にはまり、天賦の才をのばすことができない点が第10の弊害である。

徂徠は、そうした弊害を認識し、「師教よりは朋友の切磋にて知見を博め學問は進侯事に候。(中略)朋友に交り門風に染侯事是第一の事に候」という。それは、「朋友聚侯て會讀くはいとくなどいたし侯得ば。東を被言侯て西の合點參り侯事も有之候」⁶¹⁾からである。的はずれであっても、仲間同士の自由な議論のなかに真理がみいだされることもある。

会読は、実際に、どのようにすすめられたのだろうか。徂徠が導入した会読は、のちに荻藩学明倫館の第2代学頭になる徂徠の高弟山県周南にうけつがれる。周南から永富独嘯庵にうけつがれ、その門人亀井南冥にうけつがれる。その後、南冥の門人広瀬淡窓、さらに蘭学者の坪井信道、その弟子緒方洪庵へとうけつがれる⁶²⁾。

亀井南冥が、明和元(1764)年に福岡唐人町にひらいた私塾蜚英館の学規から会読の実態を

窺い知ることができる⁶³⁾。

会読者。会集諸生。共就一書。講究其義也。其式舎長一人。設几坐上頭。執列名版与所講之本。逐名按章。聽其講義。以墨批圈於每名下。以記勝負。就諸生中。扨取一人。発難起問。是名問者。問者発問。諸生取次。各以其所見対。対訖。問者判其得失。判定。而後舎長逐名批圈之。若諸生不允受其判。則与問者相論報。窮詰乃止。若両義未定。或雖窮詰。猶有余義。則舎長乃從容教論。得典故精覆意義明白。而後始判勝負。又諸生或発難。問者通之。則舎長為判其得失。判定批圈如初。読畢。舎長安版几上。数其批圈。改次諸生席単。以定重会坐班。圈多為勝。批多為負。圈最多者。進為問者。稱為奪席之榮。若三不奪席。升等与舎長相齒。論語曰。君子無所争。今会読設勝負之式。争奪其席。於義似失。雖然中古有讎校之名。謂両本相覆校如仇讎也。可見講書之難。雖華人猶如是。而況我東人子乎。年少惡負。人情之常也。其唯惡負。見以求勝。其唯求勝。是以自奮。奮斯強。強斯進。進斯樂。樂斯久。久斯化。既化而不覺。其修自来。不可禦也。此之謂教之術矣。夫子謂射。為君子之争。以其不怨勝者。而求正於己也。余於会読也。取之。

意訳すれば、以下のとおりである。会読とは、塾生が会同し、ともに課書について、その内容を講究することである。会読にさいしては、舎長が一人、上座にしつらえられた机にすわる。塾生名簿と講究する課書一冊をならべ、塾生が順次章ごとに講じるのを聞き、それぞれの姓名のしたに批点と圈点を墨書し、勝敗をしるす。舎長は、塾生のなかから一名えらび、難問を提示させる。この問者が質問し、塾生がそれぞれ所見を述べ、対峙する。討論がおわると、問者はその勝敗を判定する。舎長は、討論にくわわった塾生のそれぞれの姓名のしたに圈点をしるす。塾生が判定を承引しないばあいには、問者と討論をくりかえさせる。問いに窮したところで、討論をおえる。両者の言い分が食い違ったり、問いに窮したとしても、なお道理にかなっているところがあれば、舎長は從容として教え諭し、典拠をあげ、その意義をくわしく繰りかえし、明白にする。そのうえで勝敗を判定する。塾生がまた難問を提示する。この問者が難問をとくことができれば、舎長はその得失を判定する。判定の批点と圈点は上述のとおりである。

講義がおわると、舎長は塾生名簿を机上におき、その批点と圈点をかぞえる。塾生は、席札をあらため、つぎの会読の席次をさだめる。圈点、おそらく○印が多ければ勝ち、批点、おそらく×印が多ければ負けである。圈点がもっとも多いものが問者になる。これを奪席の榮譽という。問者が三度席を奪わなければ、席次は舎長と同等になる。ちなみに咸宜園の奪席会はひろく知られるが、広瀬淡窓が亀井南冥からうけつぎ、精緻にしたものである。

『論語』に、「君子、争う所無し」とある（八佾第三）。会読に勝負の方式を採用し、席を争奪することは、道義を失するようなどころもある。しかしながら、中世に讎校^{しゅうこう}という表現があった。讎校とは、たがいに競いあうふたつのライバル校を意味する。両校、鎬を削る

こと仇讎の如し、といわれる。経書の難解さを知るべきである。中国人にしても同様である。まして、われわれ日本人にとっては難解至極である。

年少者が負けるのをいやがるのは、人情の常である。負けるのをいやがり、勝つことだけに固執する。勝つことにこだわれば、みずから奮起する。奮起すれば、勝つ。勝てば、学問が上達する。上達すれば、楽しくなる。楽しくなれば、継続する。継続すれば、進化する。進化したとしても、それに気づかない。修業は、おのずからすすみ、さえぎることはできない。これを教えの術という。孔子は、弓術こそ君子の争いであるという。勝者を怨まず、みずから善悪をただそうとする。余は、会読において、こうした方針を採用する。

藩学、家塾、私塾などでは、学頭あるいは塾主のもとに、塾長、都講、訓導、舎長といった職掌がもうけられ、門生や塾生が分担する。舎長は、上級生のなかから選ばれ、下級のグループの指導にあたる。会読には、2, 3 人の対読、7, 8 人の輪読があるが、南冥塾では輪読がおこなわれていた。

会読は、師の講説を一方的に聴く講釈の弊害をおぎなうために考案されたものであり、学問にこころざす朋友がたがいに競いあい、切磋するという協同学習である。その学習効果を認識し、会読をとりいれた儒学者は、血気さかんな若者に勝敗にこだわることなく、あくまでも真理の追究に徹するよう諫める。

さいごに独看にうつる。一斎は、独看についてつぎのように述べている⁶⁴⁾。

獨看ノ書目下ニ拳レドモ、是ノミナラズ、四書、五經、會讀諸書ヲモ、兼子邵子朝暮晝夜ノ課ノ如ク、譬ヘバ晝前經書ヲ讀ミ晝後ハ史子、夜分ハ詩文ノ類トイフヤウニ分テ讀ミ、不審ノ條ハ一々質問スベシ、

以上數種、大抵卒業スル輩ハ、同志ト言ヒ合セ、四書、小學、詩書ノ類ヲ輪講スルモ可ナリ、尤教授ノ人、是ヲ聽テ誤解ヲ正スベシ、

詩文等ノ心懸有ル者ハ、此頃ヨリ、餘暇ヲ求テ肄業スベキナリ、

此類、潜心シテ讀ミ、不審紙ヲ貼ケ、師授ノ人ニ教ヲ乞フベシ、モシ然ルベキ朋友アラバ、二三輩集リテ、互ニ討論シテ讀ム、益宜シ、

啓蒙ハ解シ易カラザレドモ、周易本義ヲ讀ム爲ニ、早ク業ヲ卒フベシ、

通鑑綱目卷帙浩翰ナレバ、最初ヨリ並べ讀ムモ可ナリ、

一斎は、独看のテキストとして、『伊洛淵源録』、『近思録』、『性理字義』、『易學啓蒙』、『家禮』、『資治通鑑綱目三編』、『大學衍義』、『貞觀政要』をあげる。『伊洛淵源録』は、朱熹が著した朱子学の入門書で、北宋の周敦頤^{しゅうとんい}、程顥^{ていこう}、程頤^{てい い}、邵雍^{しょうよう}および程兄弟の友人、門人、計47人の伝記や言行、逸話などを採録する。『近思録』は、北宋の四子、すなわち周濂溪^{しゅうれんけい}、張橫渠^{ちやう}、程顥^{おうえい}（明道）、程頤^{いせん}（伊川）の遺著・語録のなかから重要な箇条を朱熹が編集したものである。日本でも、朱子学の入門書として普及した。『性理字義』は、朱熹の高弟陳淳が

著した哲学辞典で、性理学（朱子学）の重要な概念を解説したものである。『易學啓蒙』は、朱熹が五經のなかでもっとも難解な『易經』は義理、すなわち道理と占筮の両面から解釈すべきであるという立場から易の図式・占筮について解説したものである。『家禮』は、朱熹があらわした儀礼書で、家を治めるための先祖供養のあり方や木主、すなわち位牌などについて具体的に示したものである。水戸光圀は、『家礼』にもとづき先祖供養や葬祭の方法をさだめたといわれる。『資治通鑑綱目』は、朱熹が司馬光の『資治通鑑』を儒教的名分論にもとづき綱目に編集した編年体の史書である。日本の『神皇正統記』や『大日本史』などの史論におおきな影響をおよぼす。『大學衍義』は、南宋の真徳秀が『大学』理解に役立てるために、他の經典と史書の関連記事を編集し著述したものである。『貞觀政要』は、唐の呉兢ごきょうの撰になる雑史で、唐の太宗が群臣と政治上の得失を問答した言や群臣たちの事跡を分類編纂したものである。

学習者は、こうした漢籍を独力で読む。疑義があるばあいには付箋をはり、師や先輩に教えを乞う。朋友があつまり、疑義について討論するのも有益である。一斎は、独看にも会読の利点を取りいれようとする。

『易經』は、『周易』、『易』とも呼ばれ、もともと占筮の書であったが、經（本文）に十翼（解説部分）が付けくわえられたことにより陰陽哲学や宇宙論をそなえることになり、その後の中国人の世界観や人生観だけでなく、自然学の分野にまでおおきな影響をおよぼす。一斎は、『易經』を重視し、『易學啓蒙』の独看をおえれば、すみやかに『易學本義』にうつるようすすめる。朱熹が著した『易學本義』は、宋代の易学研究の到達点をしめす『易經』の重要な解説書である。『資治通鑑綱目』は、59巻にもおよぶ浩瀚なものであるので、一斎は年代順に独看することを奨励する。

玄明は、誠求堂では、講釈からはじめ、課書の意味や内容をまなぶ。やがて会読にもくわる。青木周蔵は、のちに「多辯にして議論を好む、否、議論を好むといふよりは寧ろ講釋を好む」と評される⁶⁵⁾。玄明は、対読や輪読で弁舌をふるい、塾主による試業でたかい評価をえたとおもわれる。

誠求堂の同門のなかには、明治期の実業家中上川彦次郎がいた。彦次郎は、安政元(1854)年に生まれ、「十四、五歳ごろまで藩の儒者の手嶋仁太郎（物斉と号す）に学び、物斉の死後は、弟の橋本塩巖について学習した」⁶⁶⁾。彦次郎の母親は、福沢諭吉の姉の婉である。彦次郎は、諭吉の甥にあたる。

翌万延2年閏8月、仁太郎が急逝する。仁太郎の実弟橋本忠次郎が多くの寄宿生や通学生のために誠求堂をひきつぐ。忠次郎のもとで、玄明はふたつの重要な体験する。ひとつは、忠次郎から「學問ハ活學問ナラサル可ラス」という考え方をまなんだことである。

忠次郎は、文化13(1816)年に生まれ、のちに塩巖と号する。幼時より、兄仁太郎と行動を

ともにし、中津藩儒の山川東林に師事したのち、熊本の藩学時習館教授辛島塩井の家塾にまなぶ。忠次郎は、帰藩後、進脩館教授に挙用される。もともと古義学を奉じていたが、折衷的な立場をとる⁶⁷⁾。

塾主の交替により、経書の講究を必要最小限にとどめ、「古今内外ノ治乱興亡ノ蹟ヲ知ルヘキ歴史ノ講究ニ力ヲ注カサルヘカラス」という方針にかわる。忠次郎は、詩賦文章を末技とし、史書を講じる⁶⁸⁾。玄明は、忠次郎の「活學問」が「隱者的ノ學問」に対置される学問であると認識し、それに「帰依」する。

18世紀末以降、対外的危機意識がつよまるなかで、庶民のあいだでも歴史への関心がたかまり、さまざまな史論があらわれる。なかでも頼山陽の『日本外史』は、文政10(1827)年に脱稿し、ひろく読まれる。玄明は、佐々木向陽が講じる『日本外史』をきいていた。水戸光圀が着手した『大日本史』は、完成するのは明治期になってからであるが、嘉永2(1849)年には本紀と列伝が出版される。いずれも、朱子学的な名分論により、幕末の尊皇論におおきな影響をおよぼす。史論は、実践的政治論という性格をおびる。

そのころ、中津にも、江戸でおこった政治弾圧事件の詳細がつかえられる。安政5(1858)年6月、大老井伊直弼は勅許を得ないまま日米修好通商条約に調印し、さらに家茂の將軍継嗣問題を独断で裁定する。安政5年9月から翌年にかけて、井伊はみずからの専断に反対する一橋慶喜擁立派の公卿、大名、志士にたいし徹底した弾圧を断行する。吉田松陰も、違勅条約をはげしく糾弾しただけでなく、井伊のもとで弾圧を強行する老中間部詮勝^{まなべあきかつ}の暗殺を企てたとして江戸に送られ、安政6年10月に江戸伝馬町の牢獄において斬首刑に処される。

安政の大獄は、松下村塾グループの人びとの反幕意識に火をつける。高杉晋作は、帰藩の途上で悲報に接し、「実ニ私共モ子弟之交ヲ結ヒ候程之事故、仇ヲ報イ候ラハテ安心不仕候」⁶⁹⁾と決意を述べている。尊王攘夷運動は、幕閣の専断を非難する運動となり、やがて反幕運動へと展開する。

頼三樹三郎は、尊王攘夷論を唱え、將軍継嗣問題について一橋派とむすび、はげしく幕政を攻撃し、安政6年10月に刑死する。忠次郎は、若い頼三樹三郎の死を悼み、幕府の暴挙は「徳川氏滅亡ノ前兆」であると非難し、玄明にその「獄中作」と題する七言律詩を紹介する。玄明は、尊皇思想を奉じる忠次郎の言葉に感動し、はじめて「天下国家ノ将来」に不安をいだく。

郷国が尊王攘夷運動で沸き立つなかで、僻地の地下医の家に生まれ育った玄明は、時代の流れに取り残されていた。中津において幕末の前途多端な政情をかいまみ、ようやく時勢に関心をもつようになる。

三 福沢諭吉との邂逅

もうひとつの出来事は、「福沢氏」にめぐりあったことである。玄明は、ある日、忠次郎にさそわれ、かれの親戚筋にあたる福沢諭吉の実家をたずねる。忠次郎が玄明を同行したのは、玄明の野心を見抜いていたからであろう。

忠次郎は、中津藩士橋本浜右衛門の養子である。福沢諭吉の母^{おじゅん}於順は浜右衛門の長女である。忠次郎にとって、於順は義姉にあたる。於順のもとには、息子諭吉から手紙や写真がとどけられていた。玄明は、はじめて写真を見、忠次郎と於順との会話を耳にする。諭吉は、中津藩の下級藩士の家に生まれながら、苦学の末に幕臣にとりたてられ、「重大ナル使命」を帯びた「米国ニ赴ク使節」への随行を命じられる。実際には、写真は万延元年の遣米使節に咸臨丸軍艦奉行木村摂津守の従僕として渡米したさいのものであり、このとき、文久元年12月には外国奉行竹内保徳を正使とする遣欧使節の随員として渡欧する⁷⁰⁾。

のちに玄明が知ったのは、中津藩が「藩の公用についてのみならず、今日私の交際上、子供の交際」にいたるまで上下の区別がきびしい藩である⁷¹⁾ ことである。きびしい身分差別にさいなまれていた諭吉は、みずから習得した蘭学や英学によって封建的身分制度の壁をつきやぶり、幕臣にとりたてられる。玄明は「胸中自ラ一種ノ感慨」をおぼえる。「階級制度」の呪縛のなかで喘ぐ玄明にとって、みずからの才覚によって「封建門閥」の重圧をはらいのけた諭吉こそ、「我カ學フヘキ人」にほかならない。玄明は、「福沢氏ノ方針」にならって努力すれば、かならず「目的」を達成できると確信する。

いまだに意識化されていないが、玄明にとって、諭吉はふたつの点で指標となる。ひとつは、外国語の習得である。諭吉が獲得したのは外国奉行支配下の翻訳方という瑣末な地位にすぎないが、外国語は封建的身分制の障壁を越える武器になりうる。諭吉は、蘭学を英学へとおしひろげ、開国によって日本が包摂された国際社会のなかへ雄飛する。同郷の大村益次郎は地下医の家に生まれながら、蘭学を兵学や軍事学へとおしすすめることによって倒幕運動の先陣をきる萩藩の軍事部門の責任者という地位を獲得する。対外的危機意識がつよまるなかで、外国語を習得すれば、西欧の近代科学や近代文化の扉を開くことができる。

もうひとつは、海外への視線である。玄明は生まれ故郷の土生村や藤曲村から遠望できる海を隔てた世界にあこがれていた。中津にわたり、諭吉をとおして、漠然としたものながらオランダ以外の西欧世界を垣間見る。それは玄明が知る西洋医学の基礎としての蘭学とは異なる新鮮な学問を用意する世界でもある。少なくとも福沢諭吉との邂逅により、玄明の脳裏には、語学の学習、海外渡航という選択肢が刻み込まれる。

玄明は、医家のもとで蘭学を修得しようと決意する。忠次郎から大江久、神尾雄策、藤本玄岱という3名の蘭方医を紹介される。蘭学を修業するためには、誠求堂にとどまることはできない。おそらく豪商富永家に寄食し⁷²⁾、蘭学の修業にとりかかる。中津藩は、前野良沢

以来、蘭学の伝統があり、第 5 代藩主奥平昌高の時代に全盛期をむかえる。昌高は、藩医の
大江春塘に蘭和辞書の編纂を命じ、文政 5 (1822) 年に『バスタード辞書』(Bastaardt) を刊
行する。寛政 8 (1796) 年成稿の『波留麻和解』^{ハルマわけ}につづき、天保 4 (1833) 年完成の『ズーフ・
ハルマ』に先駆けたものである。

中津藩でも、嘉永 2 (1849) 年 6 月にジャワから長崎に牛痘漿と牛痘痂が届けられたときに、
牛痘接種をはじめようという機運がたかまる。神尾雄策は、この年の 12 月に藤野啓庵と連名
で「種痘嘆願書」を藩主奥平昌服^{まさもと}に提出し、藩医辛島正庵、藤本玄岱などとともに領民すべ
てに種痘を実施する⁷³⁾。神尾雄策は、京都の漢蘭折衷の医家小石玄瑞のもとで修業する。藤
本玄岱は、帆足万里のもとで儒学をまなんだのち、安政 2 年 6 月に大坂の適塾に入門する。
福沢諭吉は、その 3 ヶ月前に入門していた。帰藩後は、村上玄秀、神尾雄策などとともに漢
方医学から蘭方医学への転換をはかる⁷⁴⁾。

当時、中津には大江雲澤を当主とする鷹匠町大江家と大江春塘の血をひく京町大江家があつ
た。大江久は、小倉藩医多田丈庵の次男に生まれ、京町大江家の養子にむかえられる⁷⁵⁾。春
塘の孫の代にあたる。

玄明は、大江久のもとで蘭学の修業をはじめめる。大江久は、漢学の素養がゆたかで、多少
蘭書をまなんでいたが、「文典」を習得した程度にすぎない。玄明は蘭学の修業がはかどら
ないために、神尾雄策、藤本玄岱といった蘭方医のもとで蘭書の翻訳書である『気海観瀾』、
『医範提綱』などを繙読する。『気海観瀾』は、青地林宗が文政 10 (1825) 年に著述出版した日
本で最初の物理的科学の刊本であり、19 世紀初頭のヨーロッパの物理・化学の基礎的知識が
簡潔に記述されている。『医範提綱』は、宇田川榛斎が文化 2 (1805) 年に刊行した簡潔な解
剖学書であるが、解剖学だけでなく、生理学、病理学にまで言及し、当時の医家に重宝され
ていた。しかし、オランダ語から翻訳された医学書や基礎科学書を読んだとしても、蘭学の
修業にはならない。蘭方医学の修業にほかならない。「福沢氏ノ方針」はいまだに玄明には
内面化されていない。

萩藩では、文久 2 (1862) 年 7 月に藩是を公武合体から尊皇攘夷へと転換する。即今攘夷、
破約攘夷といわれるものである。幕府が調印した日米修好通商条約が天皇の意に反するとし
て、尊皇攘夷の姿勢を鮮明にすること自体反幕行為である。萩藩は、攘夷期日とされた文久
3 年 5 月 10 日から攘夷実行にふみきり、アメリカ商船、フランスやオランダの艦船を砲撃す
る。そのために、玄明は中津をあとにすることになったという。

之(攘夷実行)カ為メ長人ハ深ク幕府及ヒ其ノ譜代各藩ノ忌ム所トナリ從テ中津藩ニ於
テモ長人タル予ト同藩士トノ交際ハ親密ヲ欠クノ情況アルニ至リタレハ予ハ終ニ中津ヲ
辞シテ郷里ニ帰レリ

外様藩が幕府に楯突けば、親藩や譜代藩に白眼視される、という常識的な構図である。中

津藩の往来筋では、その2年後に長州祭がもよおされ、民衆は攘夷決行した萩藩を支持する⁷⁶⁾。萩藩藩士は、藩外でも「攘夷ヲナシ万人ノ困苦ヲ救ヒ侯」などと説得し、「能ク人氣ヲ取り侯」といわれる⁷⁷⁾。民衆の意識と藩士の意識は乖離していたかもしれない。しかし、玄明が帰郷したのは、譜代藩の中津城下にいづらくなったためではなく、中津では蘭学をまなぶことができないためである。中津での最大の収穫は「福沢氏ノ方針」に巡り会ったことである。

おわりに

漢文は、すべての学問分野における共通基礎言語であった。儒学はもとより、医学、本草学、兵学、仏教、さらに洋学でさえ、漢文で記述される。玄明は、医業をつぐために中国の古典医薬書を判読しなければならない。そのために漢学の修業をはじめめる。漢学は、中国の儒学や中国の学問の総称であるが、このばあいには経書をテキストとして訓読し、その内容を解釈する学問を意味する。漢文の訳読のために、はじめて日本に中国の書物が舶載されたとき以来、漢学の教授・学習方法が工夫考案され、江戸後期には学統学派や地域性をこえ、素読・講釈・会読・独看という学習段階として整備される。

三浦玄明、のちの青木周蔵は、萩藩永代家老福原家の郷学菁莪堂、中津藩校進修館教授の手島仁太郎、その実弟橋本忠次郎の家塾誠求堂において漢学をまなぶ。玄明が、菁莪堂と誠求堂において、なにを、どのようにまなんだのか、素読と会読を中心にまとめておきたい。

玄明は、安政4(1857)年ころに萩藩永代家老福原家の郷学菁莪堂に入門し、万延元(1860)年ころまで素読をまなぶ。『孝教』や『論語』の軽易な部分からはじめ、『小学』、四書、五経へとすすむ。素読の意義については、さまざまに語られてきたが、玄明が素読をとおり、まなび、体得したものは、つぎの引用から窺い知れる。

漢籍の素読はことばのひびきとリズムとを反復誦する操作を通じて、日常のことばとは次元を異にする精神のことば——漢語の形式を幼い魂に刻印する学習課程である。意味の理解は達せられなくとも文章のひびきとリズムの型は、殆ど生理と化して体得される⁷⁸⁾。

玄明は、経書の素読によって「精神のことば」を「幼い魂」に刻印することによって脳裡に焼きつけられる。訓みくだし、訓読する四書は儒教思想の真髄を簡潔につたえ、五経は古代の聖人・賢人の心にせまろうとする。仏典のように音読しないが、日常的な口語とはことなる響きとリズムが未知の学問の世界へといざなう。しかも、生理的に受容されるために骨肉化する。昌平坂学問所の佐藤一斎のもとで儒学を修業し、桂川甫周に蘭学を、箕作奎吾に英語をならい、『西国立志篇』を翻訳出版した中村正直は、つぎのように述べている。

三十五歳ニ及ビ、英國ニ留學シ、ソノ後十餘年四書五經ヲ開クニ暇ナケレ氏、胸中恍惚

トゾ、頗フル記憶スル者アルカ如キハ、素讀ノ益也トイハザル得ズ⁷⁹⁾

玄明は、万延元年春、豊前中津にわたり、中津藩校進修館の教授手島仁太郎がいとなむ家塾誠求堂に入門し、本格的に漢学の修業にとりくむ。誠求堂の教授・学習課程は、進修館にならない、素読・講義・会読・独看といった課程からなるが、玄明は丙等の講義課程に編入される。手島仁太郎は詩文に長じ、講義のなかで唐詩や宋詩を講じる。玄明は、仁太郎が講じる詩の世界に新鮮な気持ちで接する。のちに書簡に李白の古詩を引用したりする。玄明は、頭角をあらわし、乙等にすすみ、会読と同時に独看にはげむ。

手島仁太郎の没後、玄明は誠求堂をひきついだ実弟の橋本忠次郎のもとで修業をつづける。忠次郎も仁太郎と同様に中津藩学進修館の教授であり、熊本藩学時習館教授辛島塩井に師事したこともある。忠次郎は、「學問ハ活學問ナラサル可ラス」という考え方にたち、政治論としての史論を講じる。玄明は、忠次郎が論じる幕末の政治状況に関心をいだくことになる。

会読は、江戸中期の儒学者荻生徂徠が儒学の教授・学習方法として導入したといわれる。中国にはない日本独自の教授・学習方法であり、蘭学の修業にもとりいれられる。会読では、門生や塾生が会同し、ともに課書について読み方や解釈をめぐり論陣をはる。師や上級生などが判定者となり、その場で優勝劣敗を決する。それは、西欧の中世大学の試問 (tentativia) における討論 (disputatio)⁸⁰⁾ を想起させる。会読は、徹底した実力主義の原理でつらぬかれる。そのために、予備的な学習がもとめられ、自学自習の精神がつつかわれる。一方で、血気さかな若者が会読に参加するために「心術の工夫」⁸¹⁾、すなわち忍耐や寛容といった心のはたらきももとめられる。実力主義の会読は、封建的身分制社会に生まれ、漢学の有効な教授・学習方法としてはぐくまれる。

しかし、玄明は漢学の学習をとおし、漢文の解読法や儒家の思想だけを身につけたわけではない。玄明は、中津滞在中に蘭学修業を決意し、萩城下におもむく。萩藩医学校好生堂で蘭学を修学し、萩藩侍医の青木家の養子にむかえられる。萩藩留学生として渡独し、ベルリン大学に学籍登録したのち、ドイツ駐在外交官として外交に手腕をふるう。青木周蔵の蘭学修業段階をあとづけるさいには、そうした事実をふまえ、外国語の修得と漢学の修業や儒家の思想とのかかわりについて検討する必要がある。

【註】

- 1) 「解説」, 坂根義久校注, 『青木周蔵自伝』, 平凡社, 1970年, 348頁。
- 2) 小倉孝誠, 「自伝の構図」, 『東京都立大学人文学部人文学報』フランス文学, 通巻246号, 1993年3月, 52~56頁。
- 3) 日野綏彦, 「福原氏家臣の構成と四境戦争」, 『宇部地方史研究』第10号, 昭和57年3月, 76頁。
- 4) 『教育沿革史草稿』四, 「家老以下私立学校」, 行政文書, 山口県公文書館所蔵。
- 5) 江口茂一兵衛, 「佐々木向陽」, 『宇部地方史研究』第5号, 昭和51年12月, 57~58頁。
- 6) 「舊熊本藩」, 文部省, 『日本教育史資料』三, 富山房, 明治23年(昭和63年復刻, 鳳文書館), 201~215頁。

- 7) 富山房編輯部編、『漢文体系』第12巻、『毛詩尚書』，明治44年（昭和59年復刻），富山房，7頁。筆者訓みくだし。
- 8) 「菁莪堂記」，山口県教育会編刊，『山口県教育史』上，大正14年，205～206頁。
- 9) 「教育沿革史草稿」四，「家老以下私立学校」。
- 10) 「軍制改革ニ付申上候事扣」，「福原家文書」，宇部市立図書館所蔵。
- 11) 「学則」，「福原家文書」。
- 12) 「舊山口藩家老福原氏（越後）厚狭郡中宇部村学校」，『日本教育史資料』三，270頁。
- 13) 笠井助治，『近世藩校に於ける学統学派の研究』上，吉川弘文館，平成6年（昭和44年第1冊），679頁。
- 14) 佐藤一斎，「初学課業次第」，同文館編輯局編，『日本教育文庫』学校篇，同文館，明治44年，747頁。
- 15) 貝原益軒，石川謙校訂，『養生訓・和俗童子訓』，岩波書店，1993年（1961年第1冊），246～247頁。
- 16) 「教育沿革史草稿」四，「家老以下私立学校」。
- 17) 「序」，近藤啓吾・金本正孝，『浅見綱斎集』，国書刊行会，平成元年，8頁。
- 18) 「国相府意見書」，末松謙澄，『防長回天史』第二編，末松春彦，明治44年（平成3年復刻，マツノ書店），232頁。
- 19) 「諭告」，『防長回天史』第二編，336頁。
- 20) 藤原彰，『日本軍事史』上巻，戦前篇，日本評論社，1987年，8～9頁。
- 21) 『防長回天史』第二編，390頁。
- 22) 「軍制改革ニ付申上候事扣」，「福原家文書」。訓点筆者。
- 23) 宇部市史編集委員会，『宇部市史』通史篇，上巻，宇部市，平成4年，999頁。
- 24) 海原徹，『松下村塾の人びと』，ミネルヴァ書房，1993年，165頁。
- 25) 藤村忠明，「佐々木松墩先生の遺稿その他における疑問点の解明について」，『宇部地方史研究』第13号，昭和60年3月，48頁。
- 26) 『防長回天史』第三編下，明治45年（平成3年復刻，マツノ書店），546頁。
- 27) 藤村忠明，「佐々木向陽」，『宇部地方史研究』第5号，昭和51年11月，58頁。
- 28) 小曾戸洋，『漢方の歴史——中国・日本の伝統医学』，大修館書店，1999年，68頁。
- 29) 『醫業成立沙汰控』，毛利家文庫，山口県公文書館所蔵。
- 30) 海原亮，『近世医療の社会史』，吉川弘文館，2007年，360頁。
- 31) 石田純郎，『緒方洪庵の蘭学』，思文閣出版，1992年，253～255頁。
- 32) 石田純郎，『オランダにおける蘭学医書の形成』，思文閣出版，2007年，185頁。
- 33) 不冷吉撰，不路乙斯重訂，杉田立卿訳述，『眼科新書』巻之一，河内屋茂兵衛（大坂），文化12（1815）年序，早稲田大学図書館古典籍洋学文庫所蔵。
- 34) 小川環樹・西田太一郎，『漢学入門』，岩波書店，1987年（1957年第一刷），3頁。
- 35) 吉田東朔，「江戸期における翻訳書の文章形成」，緒方富雄編，『蘭学と日本文化』，東京大学出版会，1971年，141頁。
- 36) 「福沢諭吉全集緒言」，富田正文・土橋俊一編，『福沢諭吉選集』第12巻，2003年，142頁。
- 37) 扶歌蘭度著，華保満訳，緒方章・緒方郁訳，大庭彦参校，『扶氏経験遺訓』25巻・薬方編2巻，安政4（1857）年。早稲田大学図書館古典籍洋学文庫所蔵。ポイントをさげた部分は，原文割注。
- 38) 岡千仞，『在臆話記』第三集第一，森銑三他編，『随筆百花苑』第一巻，中央公論社，昭和55年，333頁。
- 39) 佐伯彰一，『近代人の自伝』，講談社，1981年，111頁。
- 40) 『宇部市史』通史篇，上巻，1022～1024頁。
- 41) 「教育沿革史草稿」四，「家老以下私立学校」。
- 42) 「入門簿」，日田郡教育会，『増補淡窓全集』下巻，思文閣，昭和46年（昭和2年初版），99頁。
- 43) 「咸宜園門人出身地別人員調」，『増補淡窓全集』下巻，1～3頁。
- 44) 海原徹，『近世私塾の研究』，思文閣出版，昭和58年，99頁。
- 45) 田中加代，『広瀬淡窓の研究』，べりかん社，1993年，342頁。
- 46) 田中助一，『防長医学史』下巻，聚海書林，昭和59年（昭和28年初版），312頁。
- 47) 「村田蔵六ノ咸宜園入塾紹介」，諸家文書，山口県公文書館所蔵。
- 48) 高梨光司，『兵部大輔大村益次郎先生』，大村卿遺徳顕彰会，昭和16年，5頁。
- 49) 『養生訓・和俗童子訓』，125頁。
- 50) 「懷旧桜筆記」，『増補淡窓全集』上巻，昭和46年（大正14年初版），138頁。

- 51) 大分県下毛郡教育会編刊、『下毛郡誌』, 昭和2年, 665頁。
- 52) 『近世藩校に於ける学統学派の研究』下, 平成6年(昭和45年第1冊), 1784頁。
- 53) 「學規」, 『舊中津藩學校』, 文部省編, 『日本教育史資料』三, 明治23年(昭和63年復刻), 84頁。
- 54) 「舊中津藩學校」, 『日本教育史資料』三, 75頁。ポイントをさげた部分は, 原文割注。
- 55) 『青木周蔵自伝』, 6頁。校注者の注記。
- 56) 「初学課業次第」, 747頁。
- 57) 同上書, 748~749頁。
- 58) 山路愛山, 『荻生徂徠』, 民友社, 明治26年, 5頁。
- 59) 茂住実男, 「会読について」, 『大倉山論集』第3輯, 平成5年12月, 100頁。
- 60) 「譯文筌蹄初編卷首」, 戸川芳郎・神田信夫編, 『荻生徂徠全集』第2巻, みすず書房, 1974年, 553~555頁。
- 61) 「徂徠先生答問書」下, 島田虔次編, 『荻生徂徠全集』第1巻, みすず書房, 1973年, 468頁。
- 62) 「会読について」, 100頁。
- 63) 「蜚英館学規」, 亀井南冥・昭陽全集刊行会, 『亀井南冥・昭陽全集』第一巻, 葦書房, 昭和53年, 380頁。
- 64) 「初学課業次第」, 749頁。
- 65) 鳥谷部春汀, 『明治人物評論』第1冊, 博文館, 明治31年, 452頁。
- 66) 日本経営史研究所編, 『中上川彦次郎伝記資料』, 東洋経済新報社, 昭和44年, 4頁。
- 67) 『近世藩校に於ける学統学派の研究』下, 1784頁。
- 68) 『下毛郡誌』, 664頁。
- 69) 高杉晋作書簡, 周布政之助宛, 安政6年11月16日付, 一坂太郎編, 『高杉晋作史料』第1巻, マツノ書店, 平成14年, 84頁。
- 70) 『青木周蔵筆記』には青木の記憶違いが散見される。文久2年に派遣された使節は, 「北米合衆国ニ派遣セラルル使節」, すなわち万延元年遣米使節ではない。
- 71) 福沢諭吉, 富田正文校訂, 『福翁自伝』, 岩波書店, 2007年(1978年第1冊), 24頁。
- 72) 大島明秀, 「青木周蔵の中津滞在期——富永家所蔵史料を中心に」, Wolfgang Michel 編, 『中津市歴史民俗資料館分館村上医家史料館資料叢書』第5巻, 2006年3月, 78頁。
- 73) 川島真人, 『中津藩——蘭学の光芒』, 西日本臨床医学研究所, 平成13年, 4頁。
- 74) 『下毛郡誌』, 756~757頁。
- 75) ミヒェル・ヴォルフガング, 「中津藩医大江春塘について」, ヴォルフガング・ミヒェル編, 『中津市歴史民俗資料館分館医家史料館叢書』VI, 平成19(2007)年3月, 61頁。
- 76) 宮地正人, 『天皇制の政治史的研究』, 校倉書房, 1981年, 95~96頁。
- 77) 鹿児島県維新史料編さん所編, 『忠義公史料』第3巻, 鹿児島県, 昭和51年, 445頁。
- 78) 前田愛, 『近代読者の成立』, 岩波書店, 2001年, 181頁。
- 79) 中村正直, 「四書素読ノ論」, 『東京学士会院雑誌』第3編第2冊, 丸家善七, 明治14年(1977年復刻, 鳳出版), 6頁。
- 80) ヘースティングズ・ラッシュドール, 横尾壮英訳, 『大学の起源』上, 東洋館出版社, 昭和41年, 363~364頁。
- 81) 「舊加賀藩學校」, 文部省編, 『日本教育史資料』二, 明治23年(昭和63年復刻), 194頁。

Zusammenfassung

Der Lernprozeß von Shûzo Aoki vor dem Fahrt nach Deutschland 2
——über die Lernzeit der Shinologie——

Jun MORIKAWA

Shuzo Aoki ist im Jahre 1844 als der erste Sohn des praktischen Arzt im abgelegenen Dorf des Hagi-Daimyats geboren. Er ist eine Arztfamilie. Damals wurden die akademische Werke nicht nur über die konfuzianische Lehre, sondern auch über die Medizin, die Kräuterkunde, die Kriegskunde, und die westliche Wissenschaften mit dem altchinesische Zeichen geschrieben. Um sein Familiengewerbe fortzuführen, mußte er die Shinologie lernen. Nachdem er die Shinologie erlernte, lernte er die Holland-Wissenschaft. Im Jahre 1868 wurde er als Mediziner nach Preußen gesandt. In Preußen immatrikulierte er sich an der Universität Berlin, und er wurde während des Studiums zum Botschaftssekretär ernannt. Nach seinen längeren Aufenthalt in Berlin als Diplomat wurde er im Jahre 1889 zu Außenminister berufen. Die Aufgabe dieser Studie ist zu erklären, was und wie Shuzo Aoki die Shinologie gelernt hat.